

P1-041

COVID-19流行前後の女子中学生の携帯ゲーム使用の変化

小川 真由子¹、高木 久美子²、福田 博美³¹ 皇學館大学、² 藤田医科大学、³ 愛知教育大学

【目的】

COVID-19 流行により、若年層の電子機器の利用状況についての変化について社会が注目している。本研究では、女子中学生の携帯ゲームの利用について確認することを目的とした。

【研究方法】

2018 年 2 月と 2021 年 2 月に、調査協力を得られた A 中学校の 3 年生女子 328 名（2018 年 145 名、2021 年 183 名）を対象として行った。集合調査にて質問紙を用い、主に携帯ゲームの使用状況を調査した。倫理的な配慮は、自由参加、個人情報の保護等について口頭で説明し、アンケート回収で同意とした。また、本研究内容に関する利益相反（COI）事項は存在しない。

【結果】

インターネットの使用内容は両年とも多い順位に変化はなく、「SNS（LINE、Instagram、Twitter、Facebook 等）を見る」、「音楽を聴く」、「調べ物」、「動画サイトを見る」、「ゲームをする」であった。年度別の比較をした所、「動画サイトを見る」($\chi^2(1) = 5.489, p < .05, \phi = 0.019$) は 2021 年が有意に増え、「ゲームをする」($\chi^2(1) = 5.45, p < .05, \phi = 0.020$) は 2021 年が有意に減っていた。ゲームの情報源は、「友人」、「SNS」、「インターネット」の順であり、両年に大きな差はなかった。既知のゲームの種類は、多い順に 2021 年は「パズル系」、「リズム・音ゲー」、「脳トレ・クイズ系」で、順位は異なるが上位 3 位は両年同様の内容だった。ゲームを選ぶ理由の多い順は両年とも順位は同様で、「一人で楽しめる」、「暇な時に面白そうだった」、「手軽に遊べる」であった。しかし、「一人で楽しめる」($\chi^2(1) = 9.174, p < .01, \phi = -0.176$) と、「暇な時に面白そうだった」($\chi^2(1) = 6.591, p < .05, \phi = -0.149$) で、2021 年に有意に減少していたものの、効果は全て小だった。

【考察】

COVID-19 流行後の変化では、「ゲームをする」ことより、「動画サイトをみる」生徒が増え、性の情報に触れる機会が多くなる可能性が示唆された。ゲームを選ぶ理由には、人との関係を求めた欲求が増加し、ゲームでは、「RPG」、「シミュレーション」、「アクション」系で遊ぶ生徒が増えていた。

本研究は、JSPS 科研費の 21K02813 の助成を受けて実施された一部である。

P1-042

A県内の学校看護師の思い ―不安や困りごとに焦点を当てて―

川北 史恵¹、宮崎 つた子²、川瀬 浩子³¹ 独立行政法人国立病院機構 鈴鹿病院 看護部、² 三重県立看護大学、³ 三重県立看護大学 地域交流センター

【背景】

近年、医療的ケア児（以下、医ケア児）は増加しており、さらに重症化している。そのような中で学校看護師の増員がされてきている。特別支援学校は都道府県によって医療的ケア（以下、医ケア）の実施体制が異なっており、各学校に配置されている学校看護師は少人数職種で、困難感や葛藤を抱えながら働いており、離職率が高いことが報告されている。

【目的】

A 県内の学校看護師の語りから、看護をする上での不安や困りごとを明らかにすることを目的とした。

【研究方法】

A 県立の特別支援学校に勤務している学校看護師に、令和 3 年 1 月から 7 月にインタビューガイドに沿って半構成的面接を行った。面接内容は、録音した音声データから逐語録を作成し、質的帰納的分析を実施した。学校看護師の「不安」や「困りごと」に焦点を当ててコードとして抽出し、類似性・関連性のあるものを整理した。本研究は三重県立看護大学研究倫理審査会の承認を得て実施した（通知番号 202003）。

【結果】

本研究への参加に同意を得られた研究協力者 16 名を分析対象とした。分析の結果、＜学校看護師の制度上の制約＞等からなる[現状の制度]、＜保護者の意向に沿う難しさ＞等からなる[保護者の支援]、＜初めて行う医ケアへの不安＞等からなる[自身の看護経験・看護技術]、＜緊急な対応への不安＞等からなる[児童・生徒への対応]、＜学校看護師のネットワークがなく、情報共有ができない＞等からなる[看護する環境]、＜児童・生徒の状態判断の相違への戸惑い＞等からなる[多職種との協働・連携]、＜看護職の不足を自分たちからは言えない＞等からなる[学校組織]、＜地域差へのもどかしさ＞から[地域差]という 9 の[カテゴリー] が生成された。

【考察】

A 県内の学校看護師は、自分自身の個人的な内容から制度のような社会全体に関わる内容について不安や困りごとを感じており、試行錯誤しながら看護援助を行っていることが考えられる。また日々の関わりから担当する医ケア児について知り、経験を重ねることで新たな発見ややりがいも感じていたことから、学校看護師の不安や困りごとが軽減できるための支援体制の整備が必要であると考えられる。そのため、いつでも相談や意見交換ができる学校看護師同士のネットワークづくり、多職種・関係者の理解と協力、社会のニーズに応じた学校看護師の役割や環境の改善を検討していく必要がある。